

ジェニファー・ジョンストンの *Two Moons*

—母と娘の葛藤、そして天使の役割—

吉田 文美

Two Moons (1998 年) は、アイルランドの作家ジェニファー・ジョンストン (Jennifer Johnston) の第 11 作目の小説である。ジョンストンは劇作家 デニス・ジョンストン (Denis Johnston, 1901-1984) と、その最初の妻である女優シーラ・リチャーズ (Shelagh Richards, 1903-1985) の娘として 1930 年に生まれた。小説家としてのデビューは遅く 40 歳を超えてから、1972 年のことだった。現時点で小説 19 作の他に戯曲も執筆している。*Two Moons* 以前のジョンストンには、“Big House” —アングロ・アイリッシュ (Anglo-Irish) の地主が所有する大邸宅—を舞台に、そこに住む一族が衰亡していく過程を描く作家、あるいはアイルランドにおけるプロテスタントとカソリックの対立を背景にした個人の葛藤を描く作家という印象が強い。たとえば *How Many Miles to Babylon?* (1974 年) では、アングロ・アイリッシュの地主階級出身の主人公とカソリックの小作農の少年の間に生まれた友情の悲劇的な末路を描き、また *Shadows on Our Skin* (1977 年) では北アイルランド紛争を背景に、年上の女性に恋をする少年の葛藤を描く。しかし、小説家デビュー後 20 年以上を経て発表された *Two Moons* は、アイルランドの宗教的あるいは社会的な問題には殆ど触れていない。そのうえ、作中で「天使」だと名のる人物も登場する異色作である。

Two Moons の主人公は、ミミ・ギボン (Mimi Gibbon) とその娘グレース (Grace) である⁽¹⁾。ミミは 80 歳の年離れた女性で、50 歳のグレースは舞台女優として活躍している。小説の舞台は 1996 年の 6 月、ダブリン郊外の町ドーキー (Dalkey)⁽²⁾ で、主人公の母娘はミミが両親から受け継いだ家で暮らしている。題名となっている「2つの月」は、2 人の住む家から見える夜空の月と、海面に写ったその影を指す。実体はあるけれども手の届かないところにある月と、届きそうなどころにあるが実体はない月の影は何を象徴しているのか。単純に、この小説の主人公である 2 人の女性を示すものという解釈も可能だろうし、他にも多様な解釈が可能だろう。いずれにしても「月」は一般に女性の性質を象徴するものなので、2 人の女性の生き方を中心に展開する作品の題名としては、「2つの月」はふさわしい言

葉のように思われる。

Two Moons の冒頭では、グレースは3週間後にダブリンのアペイ座で上演される『ハムレット』への出演を控えて神経を尖らせている。自分が演じるガートルード役のことで頭がいっぱいなのだ。年老いた母親ミミの健康状態も思わしくなく、落ち着かない日々を送っているところに、ロンドンで暮らす娘ポリー (Polly) が、何の前触れもなくやってくる。ポリーと前後して、ミミとグレースの家を2人の人物が訪れる。そのうちの1人はポリーの婚約者ポール (Paul) である。この俳優を志す青年は、あろうことか親子ほども年の離れたグレースに惚れこんで、後にポリーとの婚約を解消してしまう。そして、『ハムレット』の初日を控えて気苦労の多いグレースの心を、さらにかき乱すことになる。もう1人の訪問者は、ポールよりも一足早くギボン家にやってくる。これが「天使」だと名乗るボニファチオ (Bonifacio) で、彼の姿はミミにしか見えない。天使ボニファチオについては後で詳しく説明するが、小説の中では決してミミの想像の産物ではないという設定になっている。翼などは生えておらず、40代のイタリア人らしき男性の姿をしている。小説の後半では天使ボニファチオだけでなく、ミミの亡くなった夫ベンジャミン (Benjamin) の亡霊までミミの前に出現する。*Two Moons* は、周囲から痴呆症も出てきているのではないかと心配されているミミと天使ボニファチオとの交流、ただでさえ仕事や家庭についての気苦労が絶えない上に、娘ポリーと自分に恋するポールとの板挟みになってしまうグレースの懊悩に焦点を当てて進む。そして、グレースが『ハムレット』の初日を終えてポールとの関係に区切りをつける一方で、ミミがボニファチオに伴われ、この世を去るところで終わる。

物語の中で天使や亡霊が登場するという設定自体は、特に目新しいものではないかもしれない。映画『ベルリン天使の歌』や『ニューヨークのゴースト』などを見ていれば、月並みと思うだろう。しかしながら *Two Moons* 以前からジョンストンの作品に親しんできた読者からすると、ジョンストンらしからぬ、いささか奇抜な設定と見える。この作品で敢えて天使を登場させる必然性は何処にあるのか。もともとジェニファー・ジョンストンの作品は、その叙情性を高く評価される一方で、非現実的な面が多いとの批判もあった。しかし、後で紹介するリンデン・ピーチ (Linden Peach) のように、その非現実的と見える面にこそ、現実の社会で起こっている問題に対するジョンストンの真摯な関心が反映されていると擁護する批評家もいる。ピーチの主張を信じるならば、この小説に登場する天使や亡霊も、現実の世界を描くための重要な役割を与えられているのかもしれない。

先ほども述べたが、天使ボニファチオは80歳のミミにしか見えず、彼と言葉を交わせるのもミミだけだ。そのため最初のうち読者の目には、年老いたミミが想像で作り出した人物なのかと映る。ミミ自身さえボニファチオが自分の想像の産

物かもしれないと疑うシーンもある。しかしボニファチオが起こす小さな「奇跡」によって、彼はミミの想像の産物ではないことが随所に示される。例えばボニファチオがミミの前に出現する時には必ず強いバラの香りがするが、ボニファチオの姿を見ることの出来ない登場人物も、その香りを感知する。またボニファチオはミミのためにコーヒーを入れてくれることもあるが、ミミ以外の人々も誰が入れたのだろうと不審に思いながら、彼の入れたコーヒーを飲む。ボニファチオは体の自由が利かなくなっているミミと一緒に外出し、新しい靴を買うのにつきあったりもする。グレースは、ミミに痴呆症が出て徘徊を始めたかと心配するが、ミミの健康状態を考えると誰かと一緒に出かけたはずだと考えるようになる。そして、ミミを連れ出した人物の正体を突き止めようと母を問い詰める。

ミミの想像の産物ではないとされている天使ボニファチオ-彼の役割を明らかにするためには、ただ1人だけ彼と言葉を交わすことが出来るミミがどのような人物なのかを考えてみる必要がある。ミミについては、まず彼女の名前について注目しておくべきだろう。小説の冒頭では、ミミという名が実は彼女の本名ではないと明かされる。

Everyone called her Mimi.

Her real name was Eleanor. A name she had never been able to bear, so when Grace as an infant called her Mimi rather than Mummy, she embraced that name with energy.

(*Two Moons* 1)

ここでわかるように、彼女の本名はエリナー (Eleanor) なのだが、*Two Moons* の中で彼女がその名で呼ばれることは全くない。さらに、“Mimi” という名は、娘のグレースが “Mummy” という言葉の代わりに、母に対して使った呼称であるということも明かされている。本名が好きでなかったミミは、積極的に娘が自分を呼ぶ名を自分の名前として受け入れた。本来の名前を捨てて、自分の娘にとっては「母」と同じ意味を持つ呼称を自分の名前として受け入れたのは、ミミの生き方を象徴する行動だ。*Two Moons* を読み進めていくと、ミミが結婚して妻そして母となることを、ごく当たり前のこととして受け入れて生涯を過ごしてきたと明らかになる。しかし同じく小説の冒頭で示唆されるように、そのような人生を送ったミミは幸せな老後を迎えているとは言えない。

Now she [Mimi] was a shadow: only the name was left to remind people that once she had moved with gaiety and authority through the world.

People looked through her now.

Indeed she sometimes wondered if she had become invisible, gradually, in the last few years losing her substantiality.

(Two Moons 1)

上の引用では、80歳になったミミが若い頃の活力や尊厳を失って、「影」のような存在になってしまっているとされている。母親としての役割を喜んで受け入れたものの、その役割を終えてしまった現在では、取るに足りないものになってしまったとミミ自身が感じている。年老いて体が思うように動かさなくなり、一人で外出することも困難になっているミミは、他人との接触が難しくもなっている。また、親しい人々はミミをかまってくれる余裕がない。ほとんどの友人たちは、すでに亡くなっているとも語られる。

‘... I [Mimi] must say it’s very nice to have someone to talk to. Grace is always so busy and most of my friends are ... well, all of them are gone. You know what I mean?’

(Two Moons 75)

上の引用では、天使ボニファチオが話し相手となってくれることを喜びながらも、他にはまともに構ってくれる人がいないとミミ自身が明かす。ミミが孤独に陥っていった経緯は、次に上げるグレースの言葉から明らかになる。

‘... to be perfectly honest I couldn’t bear to be in the same house with them [Mimi and Benjamin]. They were both so diminished by despair. I never knew what it was all about. I never asked her [Mimi] to this day. I don’t suppose she’d tell me anyway.’

.....

‘She was too old by the time he [Benjamin] died to return to some sort of cheerful equilibrium of living. She’d been out of it all for too long. Her friends had all moved in other directions. I think they found her need a bit unnerving. Now she’s imprisoned by her own infirmity. I honestly don’t think she has much more life in her.’

(Two Moons 60)

これは、グレースがポールを相手に両親—ミミとベンジャミン—が自分には理解できない絶望に囚われていたこと、そしてベンジャミンが亡くなった時にはミミ

は人生を楽しむ気力を取り戻すこともできない状態で、友人たちとも疎遠になっていたことを語るシーンである。ここでのグレースは、自分にはミミの心情が理解できない、そしてミミの方も自分には心を打ち明けてくれそうもないとあきらめてしまっているようである。一緒に暮らしている娘グレースさえも、ミミが心の内を語る相手としてはふさわしくないかのように描かれている。他の人には見えず、ミミだけに関わってくれる天使ボニファチオは、家族に心を打ち明けられず、友人もいない孤独なミミの話し相手としては、最適な登場人物なのかもしれない。

ボニファチオの登場により、年老いたミミはいくらか活力を取り戻す。*Two Moons* での「天使」は、ボニファチオ自身の言によると、亡くなった人間の生まれ変わりだ。ボニファチオも 1429 年にイタリアで生を受けた人間だったが、42 歳の時に病気で亡くなり、その後で天使に生まれ変わったという。ミミに “Bonnyface” と呼ばれるハンサムなボニファチオは、魅力的な壮年男性の姿をしている。そんなボニファチオに話し相手になってもらえることは、自分が取るに足りない存在になってしまったと感じているミミにとっては、心浮き立つ経験となる。ところが彼との交流を続けるうちに、ミミは自分が不幸な人生を送ってきたという事実を再確認するはめにもなる。

主人公が自分の来し方を振り返るという設定は、*Two Moons* 以外のジョンストン作品にもある。そしてジョンストンの小説では、主人公による過去の回想は必ずしも信頼のおけるものではなく、主人公の思い込みや勘違い、偏見なども含まれていると暗示されることが多い。この小説でも、ボニファチオとの会話の中で過去の思い出を語る時、ミミが自分の苦悩から目をそらし、ごまかそうとしていることが次第に明らかになっていく。

‘Such a lovely day,’ said Mimi. ‘When I was young I would have been up and out in the sun. I think that is what I remember. Sometimes I’m not quite sure if I remember the truth or what I would have liked the truth to be. Is that odd?’

He [Bonifacio] shook his head.

‘Not odd at all. There are lots of people who rewrite their past and, what’s more, believe it themselves. Now that is odd.’

(*Two Moons* 64; emphasis by Yoshida)

下線で示した部分では、ミミ自身も「自分が真実を記憶しているのか、それとも自分が真実であって欲しいと思うことを記憶しているのか、よくわからない」と述べる。それに対して、ボニファチオは「多くの人々が自分の過去を書き換え、さら

にはそれを自分でも信じ込んでしまう」と応じる。やがて、彼女が真実をごまかすような発言をするたびに、それを容赦なく暴くような役割を天使ボニファチオは果たすようになる。

‘Let’s talk about something else. You [Bonifacio] don’t have to feel sorry for me [Mimi]. I have led quite a good life . . . I don’t mean that I have been a particularly good person or anything like that. I mean that life has been very good to me. It’s quite easy to be happy, you know, if you go with the flow.’ She laughed. ‘That’s a new expression I heard recently on the TV. Go with the flow. I rather like that.’

They sat in silence for a while.

He watched the boats and the seagulls and the rippling sparkles on the surface of the sea and she looked inward into her life and wondered why she was telling him lies.

(Two Moons 77)

上の引用では、それまで夫ベンジャミンについてボニファチオに語っていたミミが、急に話題をそらして「私は結構いい人生を送ってきた」、「流れに任せていれば幸せになるのは、とても簡単だ」などと述べる。ところが、そう語る一方でミミは「なぜ自分はボニファチオに嘘をついているのか」と自問する。このシーンではボニファチオに語る言葉とは裏腹に、自分の人生は不幸だったとミミが自覚していることが明らかになってしまう。実際のところは「流れに任せて」生きた結果、良き人生を送ることができなかったのだ。次のシーンではボニファチオに対して自分が不幸であったことを認めようとしないミミは、癩癩を起こす。

‘I [Mimi] don’t know. I know very little, Bonnyface. I seem to have spent my life learning very little. People aren’t like that any more. They seem to want to discover things all the time. I was never intrepid. You know when Grace scooted off all those years ago to become an actress, I honestly thought she was mad. Why is she doing this? I thought. Why is she creating problems where there are none? Why doesn’t she sit tight and let life happen to her and probably enjoy it? Of course, I understand now, but I didn’t then.’

‘See! You have learnt something.’

She smiled a little sourly and took a drink.

‘It doesn’t make for happiness, you know.’

‘What?’

‘Being intrepid. Grace isn’t happy. I was happy once. I remember that so well.
When I was first married to Benjamin, I didn’t think life could be better . . .’

‘Memories plays funny tricks.’

‘I was happy.’

She stared at him over her glass, tempting him to contradict her.

He [Bonifacio] shook his head.

‘I was happy.’ She screamed the words at him.

He got up and moved slowly towards the window.

He seemed to be fading into the evening sky. The room was almost dark now.

‘You don’t remember.’

His voice was almost a whisper.

For a moment she thought it was Benjamin again, standing there, a shadow by the window.

With all the energy she could summon she hurled her glass across the room. As the door opened she heard it breaking, disintegrating on the floor.

(*Two Moons* 167-168; emphasis by Yoshida)

このシーンのミミは、表面では平穏に見える人生を送ってきた自分と娘グレースとを比較して、「自分は幸せだったことはあるが、グレースは幸せではない」と言い張る。それに対してボニファチオは「記憶は奇妙な悪戯をする」と述べて、ミミが現実から目をそらしていることを暗に指摘する。ミミはボニファチオの指摘に対して「自分は幸せだった」と声を荒げ、最後には消えてゆく彼に向かってワイングラスを投げつける。内心ではボニファチオの反論を予測しながら、実際に彼がミミの虚言を指摘すると我を忘れてしまう。その様子からは現実が見えてはいるが、それから目を背けておきたいミミの複雑な心境が窺える。

面白いことに、作中で天使ボニファチオとミミの亡夫ベンジャミンの亡霊は同時に現れることはない。しかし上にあげたシーンで、ボニファチオが消えていく時、その姿を見たミミは「またベンジャミンが現れたのかもしれない」と思う。*Two Moons* の終盤ではミミと話していた天使ボニファチオが、いきなりベンジャミンの亡霊にすり替わってしまうシーンもある (*Two Moons* 207)。ボニファチオとベンジャミンが代わる代わる姿を現すシーンにも暗示されているように、天使ボニファチオはミミを幸せな気分にする存在ではあるが、不幸な人生と向き合うことを促す点では、ベンジャミンの亡霊とほとんど同一の機能を果たす⁽³⁾。ミミが現実から目を背けて嘘をついても、天使ボニファチオによって、その嘘が見え透いたものであることが繰り返し暴かれてしまう。その繰り返しによって、ミミの

抱える苦悩の深さが、現実味を帯びて浮かび上がってくる。

ミミの不幸は、天使ボニファチオとの交流や亡霊ベンジャミンとの対決からだけでなく、娘グレースとの対比からも明らかになるように思う。*Two Moons* のもう1人の主人公であるグレースは母親のミミとは対照的に、自分の望みを叶えるためには周囲と波風をたてるのを意に介さない女性として描かれる。あまりに対照的な親子なので、現実味に乏しいと見る向きもあるかもしれない。しかし、ジョンストンの小説で現実味に乏しいと見える要素こそが、現実の社会で起こっている問題に対するジョンストンの真摯な関心を反映しており、作品の登場人物は「イデオロギーの対立 (ideological conflict) ⁽⁴⁾ が起こる場と解釈できるとするリンデン・ピーチの主張を参考にするならば、このように対照的な親子を登場させることにも、女性の生き方に対するジョンストンの深い関心が示されていると言えるだろう。

The non-realistic strain in her [Jennifer Johnston's] work reflects an ongoing concern with the whole experience of empowerment and disempowerment from which women's writing has emerged, and which, as [Emma] Donoghue demonstrates in *The Woman Who Gave Birth to Rabbits*, has been the centre of women's history for many centuries. Johnston's characters are more accurately and more interestingly seen as sites of ideological conflict . . .

. . . Locations in Johnston's novels are not only physical places, but sites of various, and usually competing, discourses and of 'real' intellectual struggles. From her early, albeit not especially original, interest in the Big House and the waning of the Anglo-Irish ascendancy, Johnston has been interested in physical premises as sites of ideological, individual, familial and communal conflict . . .

(Peach 78-79; emphasis by Yoshida)

ピーチの見解を採用するならば、例えばジョンストンの初期の代表作 *How Many Miles to Babylon?* の主人公アレックス (Alex) は、第1次世界大戦前後の時代を背景にして、人間に序列をつけたり差別をしたりするイデオロギー、戦争で華々しい活躍をすることをよしとするような男性優位主義的な考え方、個人の思いよりも全体の利益を優先するような思想などに対して疑問を提示する役割を背負った人物と解釈できる。現代のダブリン郊外の町を舞台とする *Two Moons* は、*How Many Miles to Babylon?* とは異なり、戦時下の不安定な社会を背景としているわけではない。読者によってはダイナミズムに欠ける作品と見えるだろう。しかし家族との関係に苦悩する登場人物たちの姿を通じて、どんなに平和で安定した社会に生

まれようとも、人間が直面することになるかもしれない問題を描いている。

Two Moons で、「イデオロギーの対立」と呼べるものが描かれているとすれば、社会一特に男性優位主義的な考え方の優勢な社会一が強要する、あるいは期待する役割にとらわれる個人の葛藤ではないだろうか。ミミは小説の冒頭から明らかになるように、結婚して母親になるという役割を進んで受け入れたような女性だ。いわゆる男性優位主義的イデオロギーにおいて、女性が期待されることの多い役割を引き受けた女性の典型だと考えられる。それに対して親の反対にもかかわらず女優を目指した娘グレースは、期待される役割よりも自分の欲望を優先させる女性の典型と見える。円満な両親の元で生まれ育ったミミは、さほどの抵抗もなく結婚して主婦となる道を選ぶ。しかしボンファチオとの交流を通じて暴かれていくように、夫ベンジャミンとは心を通わせることができず、彼に対する恨みを抱えたまま人生の終末を迎えている。一方、両親の反対を押し切って女優への道を選んだグレースも、仕事では成功を収めているが、イギリス人男性ジョン (John) との結婚はうまくいかず離婚を経験している。ベンジャミンが亡くなった後でアイルランドに戻りミミと同居するが、母親のミミにも娘のポリリーにも、家族より仕事を優先すると責められている。

しかし、グレースがミミやポリリーに責められるほど、身勝手に自由気侷な人生を謳歌しているのか、家族のことなど意に介さない女性として描かれているのかというと、少し違うように思える。50歳を迎えた女優グレースは、もう若くない自分に限界を感じており、今のうちに演じられる役を演じておきたいと焦っている。仕事でそのような焦りを覚えている一方で、年老いたミミの介護に心を悩ませ、娘ポリリーのことも彼女なりに気にかけている。

She [Grace] glanced at her mother in the mirror as she spoke. She was wearing her sulking face. More and more these days she wore her sulking face.

Is this my fault, she wondered. Am I not giving her fair share of my attention?

I used to wonder that about Polly too. I remember that. I used to wonder if she would turn out neurotic, paranoid, criminal even, any one or all of those things . . . Now when I look at her normality I still wonder on bad days how thin that shell might be. Will it crack one day?

(*Two Moons* 19-20)

上の引用は、*Two Moons* の最初の方のグレースのモノローグの一部である。ここでのグレースは、自分がミミやポリリーに対して十分な関心を払っていないのではないかと思ひ悩み、2人に対して罪悪感を持っているように描かれている。ポリ

一の婚約者だったポールに心ひかれながら、その気持ちを抑えようとするのも、常識的に考えて不味いからということもあるだろうが、母親として十分なことをポリーにしてこなかったという引け目があるからだろう。自分のような母親を持ちながらもポリーは精神的に不安定になったり、犯罪に手を染めたりすることもなく「普通」に育ったとグレースは考えている。その一方で、娘の「普通」に見える外見もいつ砕けてしまうか分からないという不安に苛まれていて、ポリーを傷つけることを極端に恐れているようにも見える。

グレースに奔放で抑制が利かない面があることは、彼女が安全とはいえない海での水泳に固執する様子や、周囲の人々が閉口するほど乱暴な車の運転をすることなどに表現されている。その一方で、グレース自身も「普通」の女性とは違った面を持つ自分を肯定しきれていないように見える。

Why make a stick to beat your back with?

John used to say that to her quite a lot.

Thanks, John.

Always full of helpful hints you were.

Quite endearing for a while.

Became tedious; very British, very stuffed.

At least Polly has one normal parent.

(*Two Moons* 20)

上の引用は、同じくグレースのモノローグの一部で、彼女が離婚した夫ジョンに言われた言葉を思い出すところだ。ジョンとの結婚生活はグレースにとって、最初は愛情に満ちた心休まるものだったが、やがて単調で退屈なものになってしまったことを端的に示している。一方で、娘には少なくとも1人は「普通」の親がいると語るところでは、自分が「普通」でないということをグレースが自嘲しているようにも見える。グレースは、女優という華やかな職業についてはいるが、自分の欲望と周囲の人々が期待する役割の板挟みになることの多い女性たちの苦悩を具象化した存在と見ることも可能だろう。

グレースの視点から明らかになるミミの生き方に話を戻そう。グレースが自分の目下の悩み—女優の仕事と家族の要求に応えることとの両立、およびポールとの関係—について思う時、しばしば両親との思い出がクローズアップされる。社会の規範から逸脱した面をもち、自分自身もそれを自覚していると見えるグレースの視点からギボン家の人間関係が語られる時には、ミミとベンジャミンが抱えていた問題に別の側面から光が当てられる。『ハムレット』の初日を控えているグ

レースの頭には、常に芝居の中の台詞が付き纏っているが、その中でも特に注目すべき台詞は、ハムレットとその母ガートルードの間で交わされる以下の台詞だ。

Hamlet, thou hast thy father much offended.

Mother, you have my father much offended.

(*Two Moons* 91)

この台詞の重要性は、グレースが舞台で共演することになっている役者仲間のチャーリー・ベンソン (Charlie Benson) と一緒に、ミミを連れてグレイストーンズ (Greystones) ⁽⁵⁾ ヘドライブに出かける場面で明らかになる。グレイストーンズの海岸でグレースとチャーリーは、数分の間ミミを一人にして2人で話し込んでしまう。するとミミは自分が一人で放っておかれたと2人に文句を言い、それをきっかけに生前のベンジャミンの仕打ちについても語り始める。

‘I really hate this place. This horrible grey stones place.’

....

‘I never liked it. Benjamin liked it. I used to say, I don’t want to go to that grey stones place, but he wouldn’t heed me. So exposed to the east wind. He used to go to the golf club and would leave us here on the beach. Grace and I. Exposed to that awful east wind. And here you go and do the same thing. Did you go to the golf club?’

(*Two Moons* 159)

ここでミミは、生前のベンジャミンが彼女の希望には目もくれなかったと不満をぶつける。そして、彼女とグレースを浜辺に残し、一人でゴルフをしに行った夫の自分本位な行動に不満を漏らす。ところが、ドーキーへの帰途では、ベンジャミンだけでなく彼女自身もグレースが女優になることに反対していたらしいことも明らかになる。

‘Benjamin never wanted Grace to go on the stage. Sometimes I remember everything. It’s as if a bright spotlight lit my whole past. I can see every detail. She went away then. Just like I said . . . went away. She never really came back.’

‘I am here, Mim ⁽⁶⁾.’

Charlie turned slightly towards her and frowned. Grace sat back into her seat and closed her eyes. Too many things were fighting in her head. Grace, you have your father much offended.

ベンジャミンが自分を置いてゴルフに行ってしまったのと同じように、グレースも母親である自分を顧みず、女優になるために家を出て行ってしまった。そうミミが感じていることが示唆されるシーンだ。しかしミミが自分の孤独を訴えるこの場面で、グレースの方は芝居の中でガートルードが息子ハムレットを咎める“*thou hast thy father much offended*”というセリフと重ねて、自分が女優を目指した時にミミが発した言葉、「あなたはお父さんの機嫌を損ねたのよ (“*you have your father much offended*”)」を思い浮かべている。ミミのかつての言葉とガートルードのセリフが重ねられることで、芝居の中のハムレットが母ガートルードに対して感じたのと同じような苦々しさを、若き日のグレースがミミに対して抱いていた可能性が暗示される。

自分の人生を不幸にした夫ベンジャミンに対する恨みを語るミミが、ベンジャミンの生前には彼の肩を持つかのような言動を取ったのはなぜだろう。このシーンを読んでから、生前のベンジャミンとミミの関係が語られる部分を見直すと、彼女が夫に対して異論を唱えたり、不服を言ったりしたことは殆どなかったということがわかる。

Benjamin had always thought that women should not be allowed to drive cars; sometimes, in Grace’s case anyway, Mimi had almost agreed with him. Not that she had ever said that. No. It wasn’t always wise to discuss Benjamin’s prejudices with him. Smile was what she used to do.

(Two Moons 32)

上の引用は、生前のベンジャミンが「女性は車を運転すべきではない」という偏見を持っていたことをミミが思い出すところだ。ベンジャミンの意見に対して「とにかくグレースの場合には、ほとんど賛成しそうだった」と述べてはいるが、乱暴な運転をするグレースは別としても、女性一般が自動車を運転すべきでないというベンジャミンの偏見には、必ずしも賛成でなかったことが示唆されている。しかしながら、ベンジャミンが生きていた時には、ミミはただ笑って、彼と言い争うことを避けてしまっていた。

He [Bonifacio] handed her [Mimi] a menu. She shook her head.

‘No. You do it. I’m sure you’ll choose a delicious meal.’

Benjamin had always chosen for her: that had of course been in earlier years

when he had taken her out to restaurants, before he had withdrawn from that sort of life, to his garden and his whiskey bottles and his prayers.

(Two Moons 43)

上の引用は、ミミがボニファチオと外出して食事するシーンの一部だが、メニューを手渡すボニファチオに、ミミは注文を一任してしまう。ここではミミがベンジャミンと食事に出た時も、何を注文するかは夫まかせで、自分の希望ははっきり口にしていなかったことが明かされる。夫には口答えせず、逆らわず、自分の希望は伝えないのがミミにとっては「普通」のことだったのだ。グレースがベンジャミンの意に背いて女優になった時、ミミが夫の意向に沿うような言動を取ったのも、彼女にとっては波風を立てないための当たり前のことだったのかもしれない。ミミとは対照的に、グレースはベンジャミンの思惑など全く気にしない。

Ever since she had left school, and that wasn't today nor yesterday, Grace had been taking part in plays.

Benjamin had tried to stop her, but there was never any stopping Grace when she got the bit between the teeth.

She just went to England and got on with her life there.

(Two Moons 2)

上の引用は、冒頭でミミの視点から、グレースとベンジャミンとの対立が回想される部分だ。父親の反対など、ものともしないグレースの負けん気の強さが示されている。

She [Grace] swam straight out to sea; something she had always been told not to do.

'Parallel to the shore,' her father had always warned her. 'Never out to sea. Only maniacs swim straight out to sea.'

He would scrunch backwards and forwards along the beach waiting for her to come out of the water and then without a word, he would turn away from her and walk home, not waiting for her to dry herself, or even slip on her shoes.

She had hated his presence there on the beach, like a prison warden, inhibiting in some way her freedom.

(Two Moons 128)

上のシーンは海で泳ぐグレースが、自分が子どもだった頃の父ベンジャミンの言動を思い出すところである。ここでグレースが思い出す「岸に対して平行に泳げ」というベンジャミンの指示は理論的には正しく、溺死の危険を避けるための常識だ。普通に考えると、父親が娘の身を案じての言葉だと解釈するところである。しかし、グレースはそんな父親の指示に従わなかった。そして、海岸を行ったり来たりして待つ父親の姿を、自分の自由を束縛する刑務所の看守みたいだと感じていた。グレースが父親の言動に娘に対する思いやりを感じ取れなかったのは、グレースが海から上がった後で、自分の指示に逆らった娘にベンジャミンが何も言わず、背を向けてさっさと帰ってしまったからだということも明らかだ。ここでのベンジャミンの娘に対する態度は、グレイストーンズに妻と娘を連れて行っても2人の相手をすることなくゴルフに出かけてしまう身勝手さと通じるものがある。自分本位で、妻や娘に対する愛情や思いやりを示さず、自分の考えを押し付けるだけの姿が浮き彫りになる。

これまでに取り上げたグレースやミミの回想を見ていると、ベンジャミンが女性に対する社会の束縛を体現する男性だと、単純に決めつけたくなるだろう。しかし、そのような短絡的な解釈を許してくれないのも *Two Moons* のおもしろいところだ。

Mim said it [Grace's marriage with John] wouldn't last.

Unless . . .

Yes, Mim had said, unless. She had known what men expect. Not that John was remotely like Father.

Poor old Father.

At least he kept his problem to himself; well, the safety of the nest. He was a dignified drunk. He didn't drink for fun or blokeish reasons; he was never the life and soul of any party. He remained upright, polite, buttoned into his tidy suit, until he fell down asleep and when he woke up, he put on this smart suit and started all over again.

Why?

Was that to do with expectations too?

Mum would never speak about it. She would answer no questions.

'He's gone. Leave him be,' was all she ever said.

Maybe she just didn't know either.

(*Two Moons* 51; emphasis by Yoshida)

上はグレースが、ジョンと結婚しても長続きしないとミミに警告された時のことを思い出すシーンである。グレースは男性が妻に期待する役割を演じられるような女性ではないから、結婚しても長続きしないとミミは考えたようだ。しかし、男性の期待をよく知っているはずのミミと結婚しながら、全く幸せそうでなかった「哀れな」父についてグレースは思いを巡らす。浴びるように酒を飲む時も楽しそうではなく、常に堅苦しい態度を崩さなかった父について、そんな生き方をしていたのはなぜかだろうか、もしかすると、それも「期待 (expectation)」と関係あるのだろうか和グレースは考える。ここでグレースの言う「期待」というのは、社会が個人に強要する行動規範のようなものを暗示しているように思える。

Two Moons の終盤では、亡霊ベンジャミンが遅ればせながらミミに自分の秘密を打ち明ける。実はベンジャミンは、若い時に男性と恋に落ちたことがあった。彼にとって、それは生涯で最も嫌悪すべき出来事であると同時に、最も素晴らしい体験だった。しかし彼の恋人であった青年は、自分たちは「普通の人生」を生きるべきだと言い残して去っていったのだった。

‘I was so lonely, so very unhappy, and burdened by all that façade of normality that I had to keep up. One part of me shouted that he was right, to be normal, to be like everyone else that was where happiness had to lie. The other part just longed for him, to even be able to speak about him. Then, at that dance I saw you. You were so charming, Mimi, and so warm, I thought that I would be safe with you, just like I said.’

‘It never occurred to you that maybe I might be better off with someone else. Someone . . .’

‘No. My own safety was all I was thinking about. I . . . Well, we were happy for a while, weren’t we?’

‘Maybe you were, but I always had this feeling that something was wrong. If only you could have told me.’

‘If I had you might have left me.’

‘I might. I don’t know. I didn’t know too much about such things in those days.’
She sighed.

(*Two Moons* 212-213; emphasis by Yoshida)

上の引用では、恋人が去った後のベンジャミンの苦悩と彼がミミに求めた救いが語られる。ベンジャミンは恋人が去った後、「普通」つまり「同性愛者ではない」という体裁を保って生きることに大きな重圧を感じ、孤独に苛まれて生きていた。

そんなベンジャミンは、ごくごく普通の幸せを願っていたミミに出会った時、彼女となら「安全でいられる」、つまり「普通」の人間でいられると期待して、結婚するに至った。しかし、そのことで結局は自分の不幸に彼女を巻き込むことになってしまう。結婚がうまく行かなかった理由を、亡くなっているはずの夫が現れて告白するというくだりは、少しセンチメンタルな設定かもしれない。しかし、ここでのベンジャミンの台詞から、グレースにとっては刑務所の看守のように自由を束縛する存在であった彼こそが、社会が期待する行動規範によって、ひどく苦しんでいた人間であったことが明らかになる。

ベンジャミンの台詞からは、「普通」、「安全」という言葉によって呪縛されている登場人物たちの苦悩も浮かび上がる。ベンジャミンの場合は、自分自身の「安全」に執着したためにミミを不幸にした。亡霊となったベンジャミンは、自分の過去を告白する直前にミミを自分なりに愛していたと告げる (*Two Moons* 209) が、生きている間は妻にも娘にも率直な愛情を示せないままに終わっている。ミミもまた、ささやかな幸せとして「安全な家庭」を求めたことが結果として不幸を呼び込んだ。

‘ . . . I [Mimi] didn’t demand anything from him [Benjamin]. My expectations, like most of the women of my generation, were negligible; a family, a reasonable life, safety, with luck, for ever. In return we ran good homes, were loyal wives, loving mothers, smiled at the right people; we saw our men right. It sounds pretty despicable now, but then it was the natural scheme of things. Most of the time it worked all right. I thought he loved me. I thought that we would live happily ever after. I was wrong.’
(*Two Moons* 192; emphasis by Yoshida)

上は自分の人生について嘘をつくことを止めたミミが、ボニファチオに若い頃の自分の「期待」について語るシーンだ。彼女の「期待」は、家族や安定した生活を得て、「安全」に暮らすことだったとわかる。現代では軽蔑されることかもしれないとミミ自身も認めているが、彼女の世代の女性たちにとって、良き妻そして母という役割を果たすことと引き換えに、「安全」と「程々の生活 (a reasonable life)」を手に入れることは当たり前だった。しかしながら、夫に対して口答えをしない従順な妻の役割を果たしたミミには、ベンジャミンの心の闇を祓う力を持つことが叶わなかった。夫が抱えた苦悩を理解することも出来ず、かといって彼と別れて自分の幸せを追求する機会を持つことも出来ないままに終わったのだ。

ミミと対照的なグレースでさえ、「安全」という言葉に縛られているように見え

る。

... She [Grace] looked around the room and saw the glasses, the empty bottle, coffee cups. ‘Who . . .?’

‘Vino Nobile de Montepulciano ⁽⁷⁾,’ said Mimi happily. ‘Perhaps half a bottle in the sun is too much for an old lady. I shall sleep a little more, my dear.’

Grace picked up the bottle and looked at her mother.

‘A whole bottle in the sun.’

Mimi smiled in her sleep.

There was, however, coffee left in the coffee-pot. Good coffee, not yet cold.

What goes on in this kitchen when I’m out? wondered Grace.

Who does she invite in?

Tramps?

Neighbours?

The milk man?

She got a cup and poured herself some warmish coffee.

Whoever it was could make coffee, that was for sure.

As she stood sipping at it she looked across the room at her mother. She just had the air of an old lady asleep.

I want her to be safe.

She sighed. Bloody Charlie was right; that wasn’t enough. ⁽⁸⁾

I want Polly to be safe too.

Hateful word, safe.

(*Two Moons* 111-112; emphasis by Yoshida)

上は、ミミが誰か（ボニファチオなのだが）を家に招き入れ、その人物と一緒にワインを一本空けたと気づいて動転するグレースのモノローグである。グレースの場合は、ベンジャミンやミミとは違って、自分自身の安全というよりも、母や娘に「安全であってほしい」と願う。この願いには、グレースの家族に対する愛情が表れていると同時に、家族に煩わされることなく自分の仕事に集中したいという身勝手な思いも込められている。「安全」という言葉を「忌々しい言葉」とするグレースは、自分の身勝手さを自覚して後ろめたさを感じているのかもしれない。しかし、*Two Moons* の終盤でベンジャミンが自分の「安全」だけを求めてミミと結婚したと告白するところで、グレースの “Hateful word, safe.” という独白を想い起すと、「安全」という言葉で示唆されている社会通念の呪縛の深さが明らかになるよ

うにも思う。

Two Moons の登場人物一同性を愛したことを隠して生きたベンジャミン、普通に幸せになりたかったのに、それがかなわなかったミミ、仕事と家族の板挟みで苦しむグレースーには、それぞれ社会で生きる人間の苦悩が反映されている。リンデン・ピーチの主張—ジョンストン作品の登場人物たちを「イデオロギーの対立 (ideological conflict)」が起こる場と解釈できるとする主張—は少し大仰に響くかもしれない。しかし、身近な人々の期待という形で社会が個人に強要する役割も、それに反発する個人の欲望も一種のイデオロギーと見なすことができる。ベンジャミンは社会が期待する「普通の男性」の規範に自分を合わせようとして苦悩し、自らの不幸にミミを巻き込んだ。ミミは自分が生きた時代の「女性たちに期待された妻および母親の役割」を果たすが、夫とは心を通わせることができず、結果として幸福になれなかった。グレースは母とは正反対に自分の欲望に従って生きようとするが、自分の母親や娘の期待という形で突き付けられる社会規範を完全には否定できず苦悩する。それぞれの登場人物が、社会の「期待」と個人の「欲望」との間の葛藤を具現化しているように思われるのである。

* 本論は、2013年10月20日(日)に行われた日本イェイツ協会の第49回大会(第2日)における研究発表の原稿に加筆修正をしたものである。

[注]

- (1) インターネットなどで *Two Moons* について検索すると、「3世代の女性たちを描いた」というような紹介がされていることがある。確かに、この小説にはグレースの娘ポリーも登場するが、ポリーの登場は小説の前半部のみで、その心情が語られるシーンもごくわずかである。*Two Moons* の主役はミミとグレースの2人と考えていだろう。
- (2) ドーキー (Dalkey): アイルランドの首都ダブリンの中心から20kmほど南にある町。ジョンストンが現在住んでいるダン・レアリー(Dún Laoghaire)-ダブリンの南12kmにある港町-からも近い。アイルランドを代表するロックバンドU2のメンバーをはじめ、有名ミュージシャン Enya や多くの著名な作家が住居を構える高級住宅地として知られる。ジョンストンの父デニスもこの地で余生を過ごし、弟マイケルはドーキーの学校教育プロジェクト Educate Together に長く関わった。ジェニファーも Dalkey Book Festival などのイベントに数多く参加している。次作の *The Gingerbread Woman* (2000年) でも、彼女にとって縁の深いこの町が主要な舞台となった。
- (3) ボニファチオとベンジャミンは同一の機能を果たすだけでなく、同一の存在

であり、それゆえに同時に現れないのだとも解釈できる。名前のイニシャルがともに“B”であることも、それを示唆する。また小説の最後の方で、ベンジャミンは “I thought he [Bonifacio] would be more acceptable to you. I thought he was the sort of man that you would like; warm to.” (*Two Moons* 208)、 “I thought that if I came. If I . . . You might not . . . You might have closed your eyes and ears to me. I thought that.” (*Two Moons* 209) などと、ミミに拒否されることを恐れて最初はボニファチオの姿で現れたと解釈できるような発言をしている。

- (4) リンデン・ピーチは、「イデオロギー」という語を「政治的信条」という狭義の意味ではなく、「社会のあり方や人間の行動規範についての考え方」という広い意味で用いているように思われる。著者も本論では、同じ意味で「イデオロギー」を使用した。
- (5) グレイストーンズ(Greystones): ドーキーから約 20km、ダブリンからは約 40km 南にある町。アイルランド海に面し、海水浴場として有名な砂浜と灰色の岩の多い海岸がある。
- (6) Mim: ミミ (Mimi) の名をさらに短縮した呼称。作中でグレースがしばしば使用する。ミスプリントではない。
- (7) Vino Nobile de Montepulciano: 正確には、Vino Nobile di Montepulciano。イタリアのモンテプルチャーノで生産される赤ワイン。
- (8) Bloody Charlie was right; that wasn't enough.: ここでの “that” は、グレースが女優の仕事をごなしながら、自宅でミミの世話をし続けることを指す。グレースの芝居仲間のチャーリーは同性愛者で、自分の性的指向を認めない老母と円満な同居が望めないことから、罪悪感をおぼえながらも母をロンドン近郊の老人ホームに預けている。そして自分が家を留守にしている間のミミの安全を気にかけるグレースに対して、安全のことだけを考えるならミミを老人ホームに預けるしかないと告げるシーンがある (*Two Moons* 87-88)。

[Works Cited]

- dlr Libraries (Dún Laoghaire-Rathdown County Library Service). “Jennifer Johnston at 90 Exhibition: 25 January-31 March 2020.” 閲覧日: 2020 年 2 月 20 日
<https://libraries.dlrcoco.ie/sites/default/files/Jennifer%20Johnston%20exhibition.pdf>
- Johnston, Jennifer. *How Many Miles to Babylon?* First Published in 1974. London: Penguin, 1988. Reissued in 2010.
- , *Two Moons*. London: Review (Headline Publishing), 1998.
- , *Shadows on Our Skin*. First Published in 1977. London: Penguin, 1991.

(Now available from Headline Review or Amazon Kindle.)

Peach, Linden. *The Contemporary Irish Novel: Critical Readings*. Palgrave. Macmillan. 2004.

RTÉ Radio 1. “Miriam meets. . . Jennifer and Michael Johnston.”

<https://www.rte.ie/radio1/miriam-meets/programmes/2012/0325/350698-250312/>

March 25, 2012. 閲覧日：2020年2月20日

(“Miriam meets . . . ”: アイルランドの国営放送局 RTÉ (Raidió Teilifís Éireann) ラジオ第1で放送されていた Miriam O’Callaghan によるインタビュー番組)